IV | [特集]コロナ禍の中のミニシアター・上映者

全国コミュニティシネマ会議2021

ディスカッション

“持続可能”な映画館/コミュニティシネマ

パネリスト
山崎紀子[シネ・ヌーヴォ]
小坂誠[第七藝術劇場]
林未来[元町映画館]
大高健志[Reel(『偶然と想像』『鈴木さん』)]
浅倉奏[APARTMENT / Bunkamura ル・シネマ]
畑あゆみ[山形国際ドキュメンタリー映画祭]
濱治佳[山形国際ドキュメンタリー映画祭]
–
志尾睦子[シネマテークたかさき/高崎映画祭・司会]

ディスカッション登壇者

志尾睦子(司会) 今回のコミュニティシネマ会議は「持続可能な映画館/コミュニティシネマ」というテーマを掲げています。「持続可能な映画館」とはどんなものなのか。今年の新年早々、岩波ホールが7月末での閉館を決めたという大変衝撃的なニュースが飛び込んできました。岩波ホールは、多くの人がこれからも「持続する」と思っていた映画館で、映画と共に生きようと思っていた私たちにとっては動揺させられるニュースでした。私たちは、2001年に「コミュニティシネマ」という名称を掲げ始めたときから、持続可能な映画館とはどういうものなのか考え続けてきました。この2年間、コロナ禍の中で、これまで放置してきた様々な課題が可視化され、明らかになり、ミニシアターやコミュニティシネマという存在の脆弱さも、明白に認識されました。脆弱なミニシアターやコミュニティシネマを助けてくれたのが、SAVE the CINEMAやミニシアター・エイド基金に代表されるようなミニシアター支援の動きでした。実際、クラウドファンディングによって得られた募金をいただいたことは運営を継続する上で大きな助けになりました。それ以上に、これほど多くの人がミニシアターや上映者を大切に思ってくださっているのだと実感できたことが、活動を続ける大きな力になりました。

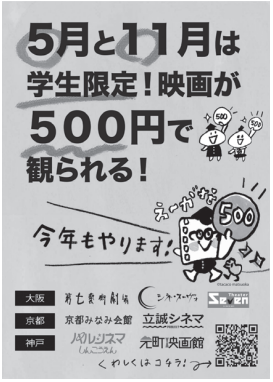
コロナ禍で映画館を開けること自体が難しい中でも、新しい映画館の形や、上映の方法は模索されてきました。先ほどのプレゼンテーションにあったように、新しい映画館や上映の場がつくられています。その一方で、これまでやってきたことをより深めたり強化したりすることで持続可能なあり方を見出していったところもある。そういう事例として、関西の映画館の連携があります。それぞれがとても個性的な映画館でありながら、力を合わせて何かをやろうというときの京阪神のミニシアターのチームワークはすごいなと思います。

関西の映画館の連携にみる「持続可能性の模索」

林未来　全国コミュニティシネマ会議で、関西の映画館の連携に注目していただけるのはとてもありがたいと思います。「元町映画館」は2010年にオープンして、今年11周年を迎えたばかりですが、開館直後の2011~12年に、映画館のデジタル化、上映機材をフィルムからデジタルに転換しなければいけないという事態に直面しました。これはみんなで知識と情報を共有したほうがいいと、大阪の第七藝術劇場の元支配人の松村厚さんが、デジタル化に向けた勉強会を京阪神のミニシアターに呼びかけてくださった。それで集まったのが連携のきっかけになりました。集まると必ず「あの作品どうだった」「今度やるあの作品ってどうなん」という話になり、情報交換をする時間が生まれ、京都、大阪、神戸で同じ作品をやるときに、一緒にチラシを作ろうかとか、1館だけで東京から監督や俳優さんをよぶことは難しいので、三県の映画館に回ってもらうことにしようとか、そういった連携が自然発生的に生まれました。

学生500円キャンペーン「え～がな500」

元町映画館は、若い人、学生さんにたくさん映画を見てもらいたいという思いでオープン当初から学生料金を1000円に設定しています。当時は大学生料金が大体1500円ぐらいで、1000円という思い切った割引料金にしたにも関わらず、学生さんは来てくれず、年間3%くらいの動員でしかありませんでした。そこで、2014年に「春の学生500円キャンペーン」を企画して、入学式が行われる大学の校門でチラシを配り、「500円で映画が見られる」とSNSで拡散するなどして、広報宣伝につとめた結果、学生動員のパーセンテージは2桁に上がりました。かなり手応えを感じたので、これを京阪神の賛同してくれる映画館で一斉にやれないかと、いろんな劇場に声をかけました。大阪の「第七藝術劇場」と「シネ・ヌーヴォ」、京都の「京都みなみ会館」と「立誠シネマプロジェクト」、神戸ではうちと新開地の「パルシネマしんこうえん」、この6館で「え～がな500」という企画名をつけて学生500円キャンペーンをやることになりました。



えーがな500　チラシ

大学生によるミニシアター応援団「映画チア部」の誕生

「え～がな500」を学生に周知するには、学生自身に宣伝してもらうと効果があると考え、2015年、学生の宣伝隊を作ろうとツイッターで呼びかけ、集まってくれたメンバーで「映画チア部」ができました。
チア部のメンバーは、「え～がな500」のチラシを街なかや大学のいろんな場所に撒いたり、告知の協力をしてくれて、その後もミニシアターのプログラムの掲示物を作ったり、監督やキャストにインタビューを行ったりと、いろんな活動を展開するようになりました。チア部は元町映画館で作ったチームだったので、大阪や京都の学生は打ち合わせがあるときに神戸まで来るのが大変だということで、2018年には、神戸、大阪、京都に分けることになり、大阪はシネ・ヌーヴォを、京都は「出町座」を拠点として、3つの映画チア部が誕生しました。神戸本部では「チアシアター」という自主上映会を実施したり、京都支部は「映画のえじき」というZINEを作ったり、大阪支部は映画を自主配給するという野心的な活動を行っていて『マイ・シークレット・ワールド』『ティーンエイジ・スーパースターズ』『ハム・オン・ライ』という日本未公開の作品の上映権を取得、字幕までつけて上映を行って、大盛況となっています。

神戸シネマポートフェス

神戸市内の映画館の連携もあります。2017年には市内のシネコン、ミニシアター、全てが参加して「35ミリフィルム映画祭」という特別上映を行いました。TSUTAYA三宮店とコラボして映画館の上映作品に合わせたレンタルDVDの棚を作ってもらったりもしました。2018年からは新開地の「パルシネマしんこうえん」「シネマ神戸」「神戸アートヴィレッジセンター」と元町の「元町映画館」で、「神戸シネマポートフェス」という街歩きと映画を楽しもうという企画を行っています。2022年からは「シネリーブル神戸」も参加して、輪が広がる予定です。京阪神の「え～がな500」は一旦終了しましたが、2018年からは神戸の4館で「超!学割シネマ」という形で継続しています。

次世代映画ショーケース

山崎紀子　「次世代映画ショーケース」は、「すごくいい映画なんだけど全然入らないね」という映画館同士の愚痴から始まった企画で、入らない=やらないというわけにはいかない作品がいっぱいあるのですが、それをどうすれば上映できるか、できるだけ多くの人に見てもらえるかを考えるところから始まりました。
2018年に、シネ・ヌーヴォと元町映画館、みなみ会館、出町座と、元・第七藝術劇場の松村厚さんとで、立命館大学の川村健一郎さんが立命館大学映像学部の創立10周年記念事業として企画されたシンポジウム「地域から次世代映画を考える」に参加させてもらいました。そのときに、

映画館の人間が、これからの映画文化を担っていくだろうと思える次世代の監督たちの新しい映画を紹介する映画祭をやろうということで「次世代映画ショーケース」の企画が立ち上がりました。
“次世代映画”について明確な定義があったわけではありませんが、未知の体験を感じられたり、突出した何かがあったり、ただただ打ち震えた作品だったり、映画館の支配人やスタッフが作品を挙げてみると、特に意見が分かれることもなく、スムーズに上映作品を選ぶことができました。2019年は、『枝葉のこと』『鉱 ARAGANE』『ザ・カオティック・ライフ・オブ・ナダ・カディッチ』『王国(あるいはその家について)』『泳ぎすぎた夜』など14作品を上映し、トークイベントを15回、シネ・ヌーヴォ、元町映画館、出町座の3館で行いました。
トークには、映画ファン以外の客層を取り込むために、神戸、大阪、京都に住んでいる小説家、建築家、研究者など映画分野以外の文化人に出てもらい、新しい目線で新しい感覚で映画について語ってもらいました。
2021年には休館していたみなみ会館を加えて、4館で24本を上映、トークは34回行いました。芸術文化振興基金へ助成を申請して、助成金を得ることができ、大きな赤字を出すこともありませんでした。次回は未定ですが、この企画は継続していきたいと思っています。

次世代映画ショーケースウェブサイト

Save our local cinemas

2020年4月には、京阪神連携の一番大きな企画「Save our local cinemas」を行いました。コロナが拡大して休館せざるを得ない事態が目前に迫った2020年4月3日に、京都みなみ会館の吉田さんから、私と林さんに「Tシャツをつくって、映画館を応援してもらいましょう」という連絡があって、すぐにデザイン案が届いて「よし、やろう」とスタートしました。ミニシアターはコロナの前から自転車操業でしたから、休館して現金収入がなくなると、とにかく何かしないとこのままじゃ潰れると、先に体が動いた感じで、賛同してくれる映画館を募って、最終的に関西の13の劇場が参加することになりました。同時にいろんな方に応援コメントをいただいて、プレスリリースを行って、Tシャツのデザインが完成すると同時に販売プラットフォームを立ち上げて、宣伝デザインを進めました。吉田さんの電話から3日後の4月6日から1週間限定でTシャツの販売をスタート、同時に寄付も募りました。1週間に絞り込んだのは、なるべく早く参加館に現金が入るようにしたかったからです。また、全国レベルのミニシアター支援の動きとしてSAVE the CINEMAとミニシアター・エイド基金が同時期に立ち上がっていたので、この動きに繋げたいということもあって1週間にしました。

Save our local cinemas ウェブサイト

Save our local cinemasでは、最終的に1枚3000円のTシャツ13,227枚を売り上げ、寄付金と合わせて合計14,759,000円を集めることができ、1館当たり277万円を分配することができました。予想を遥かに上回る結果となって驚きましたが、休館は延長となり、コロナの影響が長期化したことを考えると必要な金額でした。Tシャツの後に、京都の齊藤酒造という老舗の酒造メーカーとのコラボレーション企画として日本酒を販売、こちらは11館が参加して1館あたり29,000円の支援となりました。
関西のミニシアターでは普段の繋がりがあったからすばやく連携ができて、映画館と地域のお客さんとの結びつきも強く、映画の作り手とも関係を築いていたこともあって、全国の人たちからの支援に繋がったように感じます。

『止められるか俺たちを』上映イベント

オンラインの活用

小坂誠　大阪の第七藝術劇場/シアターセブンの小坂誠です。私からは、ちょっと緩めの連携、補足的なお話をさせていただきます。

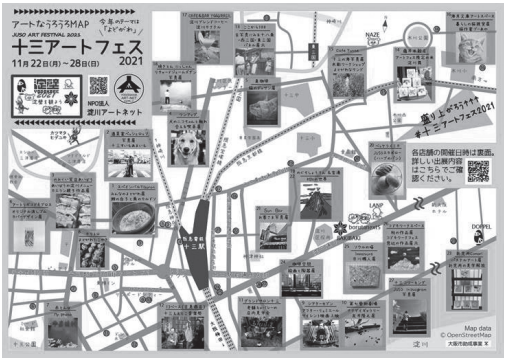
このコロナ禍において、オンラインでの舞台挨拶やトークイベントは見慣れた風景になりましたが、当館ではコロナになる前から、映画以外のイベントを積極的に行っていて、配信イベントもやりはじめていたので、比較的容易にオンラインに移行することができました。2020年は4月半ばから5月末まで休館しましたが、6月上旬の『止められるか、俺たちを』のリモートトークを皮切りに、オンラインのイベントを積極的に実施しました。そこで、山崎さんや林さんから、配信のやり方や必要な機材などについて問い合わせが来て、実際に現場を見に来てもらって情報交換をしたことがありました。日々気軽に電話やメールでやり取りできる雰囲気があるのは関西の特徴かなと思います。

当館では、サイレント映画の活弁や伴奏付上映もやっていて、特に井上陽一さんという、関西で活躍された活動弁士のイベントを力を入れてやってきました。井上さんの活弁付上映は、元町映画館でやられていて、林さんから井上さんを紹介していただいたことがきっかけで当館でもやるようになりました。（残念ながら井上さんは2021年2月に亡くなられました。）

ピアニストの鳥飼りょうさんは、サイレント映画のピアノ伴奏付上映を関西各地でやられていて、去年（2021年）は元町映画館で1週間連続上映会をされていますが、鳥飼さんの演奏付上映会はうちでもやっています。これは映画館の連携企画というわけではなく、鳥飼りょうさんがふたつの映画館と話をして開催されたものですが、昨年の元町映画館でのイベントの際には、当館のスタッフがトーク出演させていただいて、ゆるやかな繋がりが生まれています。

シネ・ヌーヴォと元町映画館、第七藝術劇場は、それほど離れているわけではないので、商業圏が重なる位置にあって、いわばライバルでもあるわけですが、連携することでこの地域の映画文化全体が盛り上がった方が、長い目で見ると自分たちの映画館が持続していくうえでプラスになる気がします。

第七藝術劇場は大阪の十三（ジュウソウ）にあります。十三では昨年11月に「十三アートフェス」を開催して第七藝術劇場も参加しました。十三にある店舗とか、施設とか、ちょっとしたスペースを開放して、十三でものづくりされている方の絵などのアートを展示するというものです。当館は元々、この地域の「町おこし」をひとつの目的として設立した映画館でもあるので、映画館以外との連携事業にも参加しています。映画館は、ひとつの劇場の中に閉じてしまう傾向があると思うので、積極的に、映画館同士でも、映画館以外とも連携を深めて、開かれた劇場にしていきたいと思っています。



十三アートフェスマップ

ARTS for the Future！（AFF）を活用～映画館を開放する

山崎　文化庁による「コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業 AFF ARTS for the Future!」は、映画館にとっては画期的な支援事業で、多くのミニシアターや配給会社が申請して、年末は忙しい方が多かったんじゃないかと思います。うちや元町映画館、第七藝術劇場も申請して、交付決定となりました。対象期間は2021年1月~12月でしたが、募集が始まったのが5月で、本格的に事業が始まったのは夏の終わり頃です。自分たちが企画した事業のほかに、外部団体の企画の実施会場となるケースも多々ありました。

シネ・ヌーヴォでは「松竹メロドラマの系譜」と「浪花千栄子特集」というふたつの特集を遡る形で申請し、7つの映画館・上映団体が連携して実施する「夏休みの映画館」と合わせて3企画を申請しました。

「夏休みの映画館」は、夏休みの1週間、小学生から中高校生まで、子どもたちにミニシアターにきてもらおうという企画で、コロナで暗くなりがちな中で前向きな気持ちで、7館で何度もミーティングをして上映する作品やトークゲストを選びました。「現代アートハウス入門」は、配給会社東風の企画で、昨年度に続き2回目の開催で2021年度は全国24館が参加しています。若い世代にアートハウス（ミニシアター）の魅力、映画の面白さを伝えたいという思いのこもったラインナップとゲストトークで、劇場側も気持ちが高揚する企画です。神戸映画資料館のAFF企画「チャーリー・パワーズ映画祭」ではシネ・ヌーヴォも上映会場になりました。

林　香港映画祭2021」はリム・カーワイ監督が企画して、京阪神、名古屋、東京の5会場で11月末~12月にかけて開催されました。関西では元町映画館、出町座、シネ・ヌーヴォが会場となっています。「ガチバーン映画祭」は、毎年沖縄の桜坂劇場で実施されている企画で、企画者の落合寿和さんがAFFを活用して「関西でもやろう」と声をかけてくださって、元町映画館、シネ・ヌーヴォ、京都みなみ会館で、11月下旬の週末に1日ずつ上映して、落合さんのトークも行いました。

「ミニシアター交流上映会」という企画もありました。これは、横浜のミニシアターや映画祭などでつくる「横浜シネマネットワーク」が企画されたもので、第1回目はシネマ尾道との交流企画、2回目はAFFを活用して関西のミニシアターとの交流上映会を開催しようということで、12月19~20日に横浜シネマジャック&ベティで、12月26日には大阪のシネ・ヌーヴォで開催。大阪では横浜に関連する映画、横浜では神戸、大阪、京都に

夏休みの映画館　チラシ

現代アートハウス入門　チラシ

香港映画祭

ミニシアター地域交流上映会　チラシ

関連する映画を上映し、支配人が互いの映画館を訪問してトークイベントを行いました。夏から冬にかけては毎月、毎週末のようにイベントをやっていました。

小坂　第七藝術劇場の姉妹館「シアターセブン」では、AFFを活用して「よどがわダイバーシティ映画祭」を開催しました。“多様性”をテーマに作品を5~6本セレクトして上映するという企画を毎年12月に行っていたのですが、今回は、それを拡大して19作品を上映、連日トークイベントも実施しました。AFFがなければこの規模での上映はできなかったし、この規模で上映したことで理解できたこともあって、非常にありがたかったです。トークイベントにはシネ・ヌーヴォの山崎さんやシネマート心斎橋の横田陽子さんにも出ていただいて、ここでも映画館同士の交流を持つことができました。

山崎　この11~12月はAFF関連でこれまで経験したことがないほど忙しかったのですが、シネ・ヌーヴォだけで企画して、プログラムを決めて、チラシを作ってという、いつもやっていることの繰り返しではなく、自分たちでは考えもつかなかったような、自分たちだけでは絶対無理だと思われる企画を実現できたことは本当に新鮮で、風通しのよさみたいなものを感じました。持続可能性につなげて考えると、自分たちの映画館を少し開放して、いろんな考えや作品を受け入れていくことは長い目で見て持続可能性につながっていくと思います。

志尾　関西のプレゼンは盛りだくさんで、聞いているだけで楽しそうだな、仲間に入りたいなと純粋に思います。小坂さんが、商業圏が重なっていて「ちょっとライバル」みたいに考えるよりも、みんなで盛り上げていくほうがいいという発想になるのが、すてきなことだなあと。コロナ禍でいろいろアイディアを出し合って、この危機を乗り越えようとしてきた。そのひとつがSave our local cinemasとなった。全国レベルのミニシアター支援の動きとしてミニシアター・エイド基金の話が出ましたが、大高健志さん、京阪神の上映者の連携のお話を聞いてどうお感じになりましたか。

大高健志　ミニシアター・エイド基金をやって、ミニシアター全体で繋がって、映画文化をまとまって広げていくことが必要なんだ、それが求められていることでもあると感じていました。バブル時代にはお客さんを奪い合うとか囲い込むという話もありましたが、もはやいろんな意味でそういうことは日本全体でもないし、とりわけ映画館はそういう状況にない。コロナ禍の前からやられていた関西の映画館の連携とか共同企画のお話を聞いて、映画館が連携して一緒に映画文化を育てていく、いろんな意味でシェアしていくことが重要だし、それが観客や映画ファンが求めていることにつながり、より発展的な姿になっていくのかなと改めて思いました。

志尾　関西の皆さんのプレゼンテーションで、いろいろと大切なトピックスが出ているのですが、その中でも私が印象的だったのは、何人かの方が映画館を「開く」「開放する」という言葉を使われていたことです。これはひとつ大きなキーワードなのかなと思います。

持続可能性を考えるときに、新しい目線、新しい感覚は必要だと思いますが、一方で当然ながら、経済的な側面を無視することはできません。きょうの会議の中でも、文化庁による支援事業AFF(ARTS for the Future!)の話がたびたび出ています。AFFには、上映を含む事業としては141団体が申請し、511の取り組みが採択されて、実績はまた数字が変わってきますが、採択の時点での支援総額は約7億8千万円だと聞いています。AFF全体としては約500億円が投じられているわけですから、その中で上映関連の事業が占める割合はわずかではありますが、上映に対して行われる支援額としてはこれまでにないほど大きなものになりました。すべてのミニシアターやコミュニティシネマがこれを活用できたわけではありませんが、これほど多くのミニシアター・上映者が文化庁に支援を申請したことはありません。コロナ禍の緊急支援として実現したことではありますが、持続可能性を考える上で、公的な支援も重要な要素であると考える必要があります。

ミニシアターの労働環境

志尾　ミニシアターや上映者は、AFFを活用し、ミニシアター・エイド基金やSave our local cinemasといった民間の支援も受けて、この2年間、とにかく頑張ってきたわけですが、その中で、疲弊していく一面もあった

と思います。コロナの中で、ミニシアターの労働環境やハラスメントの問題が表面化しました。私たちもコミュニティシネマセンターの会員間で意見交換をしたり、勉強会をしたりしましたが、京阪神の皆さんも折りに触れてそういう話もされたと思います。

余裕を持てる環境を作る

林　コロナ禍で立ち止まる機会を思いがけず与えられて、いろんなことを考えました。私たちは、映画は文化であると思っています。そして、文化はみんなのものである。映画館という場所の多くは、公立ではなく民間のものですが、公立ではなくても公共性を持った公共的な場所です。これが認知されるためには映画館は何をしたらいいんだろうということを考える機会になったわけです。映画館はどういう存在になるべきなのか。これはすごく大きい話で、時間に余裕がないと考えられません。私たちは日々、目の前に積み上がった仕事を忙しなく次々とこなしていくことしかできていない。映画館をこういうふうにしていこう、まちの中でこういう存在になっていこうという、大きな視点を全く持てていないと感じました。本来は、映画館の未来について大きな絵を描くことこそが支配人の仕事ではないのかと反省しました。大きな絵を描くためには余裕をもって働ける状況にしなければならない。それができなければ、それこそ映画館の持続可能性は実現できないし、時代に合わせた変化を受け入れることもできないと考えて、「働き方改革」が必要だと思いました。

映画館と配信

志尾　ここからは、少し視点を変えて、映画を届ける方法論のところで持続可能性を考えるタームに入ります。コロナの中で「配信」で映画を見ることが大きく広がりました。当初、上映者にとって、これは脅威として受け取られたわけですが、最近は積極的にとらえる動きも出ています。大高さんにバーチャル・スクリーン「Reel」についてお話しいただきます。

バーチャル・スクリーン「Reel」

大高　映画館での劇場公開に連動したバーチャル・スクリーン「Reel」を、私たちのチーム「Incline（インクライン）」で立ち上げました。“オンライン上のもうひとつのスクリーン”ということで、映画館で上映されている期間に限り、劇場一般料金と同料金でオンライン鑑賞できるというものです。Reelで一番やりたかったのは、通常の映画興行と同様に、配給と映画館で売り上げを分配すること、そして配信の売上は各劇場に均等に配分することです。オンライン上映で発生する利益を地方の劇場にも等しく分配することで、日本全体の映画文化を担保し続けようとするアクションであり、リアルとバーチャルでの映画鑑賞体験を、相互に補完する狙いもあります。単に劇場公開と同時に配信するというより、ある意味ミニシアター・エイド基金のコンセプトを引き継いだミニシアターの持続可能性を探るための新しい取り組みという位置づけで始めています。短期的には映画鑑賞者の増加、中期的にはミニシアターを「支えよう」という映画ファン、映画の作り手、送り手の意識の醸成、長期的には映画館で鑑賞する文化を保持することを目指しています。

僕自身は、インクラインと「Motion Gallary」というクラウドファンディングの会社の代表をやっています。インクラインは、IT関係5社のLLP（有限責任事業組合）で、黒沢清監督の『スパイの妻』や、Reelの第1回作品でもある濱口竜介監督の『偶然と創造』に携わっています。また、インクラインのメンバーのプロデューサー2名はミニシアター・エイド基金の立ち上げメンバーでもあります。ミニシアター・エイド基金では支援してくださった方々へのリターンとして、オンラインで映画を見られる「サンクス・シアター」というオンライン配信の仕組みをつくりました。これは、インクラインに加盟している「株式会社ねこじゃらし」が開発したもので、Reelの同時配信では、サンクス・シアターの配信の仕組みをさらに新しくしたものを活用しています。配信の場合、セキュリティが問題になりますが、しっかりコピーガードをした上で、「決済から30日間以内・再生開始から48時間以内」はストリーミングで何回でも再生可能という形にしています。

ミニシアター・エイド基金はクラウドファンディングでプロジェクト的に支援金を集める仕組みで、それを何回もやるより、通常の映画を見るという流れの中でミニシアターの存続をはかる、持続可能性を高める仕組み、お金が回る仕組みを作りたいということで始めたのがReelです。

コロナ禍の状況で、すでに一部のディズニー作品などは劇場公開と同時に配信開始となり、劇場公開がされず配信のみの公開となる作品もありました。コロナが終わってもこういうことが続く可能性があります。それを牧歌的に見ていると、いつのまにか「もう映画館は要らないよね」という議論が商業的な要請で、勝手に湧いてきてしまうかもしれない。とすると、先手を打って、映画を映画館で見る文化を残すことを前提とした同時配信の仕組みをつくったほうがいいのかもしれないと考えて、Reelでそれをやってみました。

ミニシアター・エイド基金の活動を通じて、全国各地のミニシアターが本当に地域に溶け込んで、地域に開かれた映画館として、地域に愛される活動をしてきたのだということを強く感じました。その結果が3億3千万円という金額にあらわれていると思います。そこをしっかりと守っていかなければならない。コロナの影響が長期化する中でも、オンラインを適切に活用して、ミニシアターが持続できる方途を模索する必要がある。Reelは、小・中規模映画の製作・配給・興行のエコシステムが中長期的に保全され、全国的に満遍なく文化資本が底上げされ、適正に更新されていくことを目指しています。単にオンライン事業者が新しいエコシステムを作って持ってくるのではなく、リアルな映画館が存在する既存のエコシステムを、いかにしてオンラインの世界へ組み込んでいくかという挑戦だと捉えていただければ嬉しいです。

配信の対象作品は、濱口監督の『偶然と創造』、そして2月4日公開の

『鈴木さん』(2021/佐々木想監督)の2作品です。現在はまだ安定運用を模索している状態なので、インクラインの配給作品は一旦閉じて、これから参加作品を募っていきたいと思っています。

バーチャル・スクリーンの仕組み

対象作品	劇場公開と連動した「Reel」への配給に同意する作品
劇場参加条件	バーチャル上映期間内に1日1回以上かつ1週以上上映する劇場　※各劇場の定休日除く
料金	劇場一般料金に準じる(1800円・予定)/割引等なし
視聴可能期間・回数	決済から30日間以内・再生開始から48時間以内はストリーミングで何回でも再生可能
配信数の報告	劇場ごとにアカウントを発行、管理画面からリアルタイム確認
分配	週〆で配信手数料を差し引き後、劇場分配原資から、参加劇場すべてで、1劇場単位で均等分配

志尾　ITという側面から映画、映画館の未来、持続可能性を考えるという発想でReelを立ち上げられたということですね。いま、『偶然と創造』は、劇場公開と配信、同時公開でやっていますが、元町映画館など実際やってみてどうですか。

林　配信との両立は可能だと感じます。意外とお客さんがバッティングしない印象があって、同時に配信されても、劇場でやっているなら劇場で見ようと思ってくださる方が多いなと思います。実際、『偶然と想像』は、年末年始は満席が出るほど入りました。同時配信されているから配信でいいや、ということでもないですね。

志尾　次に、2021年8月に配信サービス「APARTMENT」(アパートメント)を立ち上げた「Bunkamuraル・シネマ」の浅倉奏さんにお話いただきます。

Bunkamura ル・シネマの配信事業「APARTMENT」

浅倉　現在は、『Rocks/ロックス』(2019/サラ・ガヴロン)『Romantic Comedy/ロマンティック・コメディ』(2019/エリザベス・サンキー)『17 Blocks/家族の風景』(2019/デイビー・ロスバート)というル・シネマが自社で配信上映権を取得した作品と、『ワザリング・ハイツ〜嵐が丘〜』(2011/アンドレア・アーノルド ※2022年2月28日配信終了)『悪魔とダニエル・ジョンストン』(2005/ジェフ・フォイヤージーク ※2022年2月28日配信終了)の2作品を併せて配信しています。買い切りTVODで配信するサービスで、プラットフォームはvimeoを使っています。

ル・シネマでは、上映作品の選定は、基本的な形としては、番組編成のスタッフが海外映画祭で作品を見て「これを上映したい」という作品を選び、配給会社と相談をして配給権を取っていただき、上映するという流れになっていました。けれど、パンデミックで海外映画祭が完全にオンラインになり、海外では映画館も休館となり、日本でも全国の映画館が閉まる事態となって、私自身も配信で映画を見ることがすごく増えました。個人的にはアメリカによく旅行に行くので、コロナで実際には行けなくなった後もアメリカの映画館の様子をインスタグラムで見ていたのですが、映画館は1年近く閉じたままで、多くのところが「バーチャル・シネマ」という形で、オンラインで上映を行っていました。いくつかの映画館が独創的なチャレンジを配信を絡めてやっているのを見て、すごく刺激を受けました。同時に日本では、配給会社東風が「仮設の映画館」を始めるなど、多様な試みが始まって、それにも刺激を受けました。

ル・シネマには多くのお客様に来ていただいていますが、パンデミックの前から、他のミニシアター同様、観客の高齢化が進んでいて、より若い観客を獲得することが課題になっていました。パンデミックをきっかけに配信に触れる機会がすごく増えて、コロナ以前からあった課題に配信でチャレンジできないかと考えたことが「APARTMENT」を立ち上げるきっかけになりました。東急文化村は、2023年に長期休館するのでそのために配信事業を始めたのかと言われるのですがそうではなく、パンデミックで休業要請があったからバーチャルでやっていこうと考えたわけでもなく、パンデミックをきっかけにそれまであった課題を解決するのにちょうどいいタイミングかなと思って配信を始めることになりました。

配信をやるためには番組(作品)が必要です。現在は、アマゾンプライムとかネットフリックス とか、大手のSVODで素晴らしい作品がたくさん見られるのですが、そこと重ならないラインナップにしなければならない。あるいは通常のロードショー作品を配信すると、全国の映画館での上映に被ってしまうので避けなければならない。その辺りがすごく大変で「もう自社で探すしかないね」ということで、海外映画祭で見て感動したけれども日本では配給されなかった作品がかなりあったので、そういう作品の中から、若い世代に見てもらえるような作品を、劇場とは別のラインナップでやっていくことを模索しました。

コロナの感染拡大が深刻化していた2020年の春に考え始めて、8月に資料をつくって勢いで行ってしまったという感じもあります。ポイントは「オンライン興行は劇場の代替ではなく、拡張。あくまで劇場とオンライン、両

APARTMENT Webサイト

輪で構える」という点で、我々が一番大切にしたところです。いま上映中の『Rocks/ロックス』や『17 Blocks/家族の風景』『ロマンティック・コメディ』のほかに、大阪の「映画チア部」がシネ・ヌーヴォで上映する『ハム・オン・ライ』も候補に挙がっていました。そして、2021年8月にオンライン映画館「APARTMENT」がスタートしました。

コロナ禍でなかなか動きが取れない中で取りあえず頑張ってやってみて、この動きを普段紹介いただけないような枠で紹介していただいたことはすごくよかったと思いますし、お客さんから「以前はル・シネマによく行っていたけれど、足が悪くなってしまって劇場に行けなくなってしまった。でも配信が始まって、ル・シネマが上映する作品を新作で追えるようになってすごく嬉しい」というお便りをいただいて本当に嬉しかったです。

けれど、結果としては、やはり新たな収入源になるほどにはならない。パッとやってすぐに定着するということはありませんね。簡単ではないです。いまは、映画の配信だとネットフリックスやアマゾンプライム、映画以外の配信もYouTubeライブとかトゥイッチとか、家で見られる映像が無限にあるので、その中で、ミニシアターの配信というだけでやっていくとなるといろいろ工夫しないといけないし、努力しないといけないと思います。

先ほど、日々、目の前の仕事を片付けるばかりになっているという話がありましたが、我々も同じだったと思います。「APARTMENT」を新たに立ち上げることになって、自分たちの手で何かをやってみるという経験ができた、独立性をもって「これは自分たちのもの」という感覚で、みんなで、チームで考えることができたのはすごくよかったです。ミニシアターとしての連帯はとても大切なことでそれを望んでいますが、それとは対照的にル・シネマというひとつの映画館の中で、みんなで新しいプロジェクトを立ち上げることができてよかったと思います。

志尾　「映画館に人が来ないからオンライン」ということではなく「代替ではなく、拡張。あくまで劇場とオンライン、両輪で構える」というところ、すごくクリアにご説明いただきました。お客様から「映画館には行けないけど、ル・シネマが上映するものを配信で見られるようになって嬉しい」と言われたというお話がありましたが、とても嬉しい言葉だし、配信においてもセレクションが重要なのだと感じたのですが、浅倉さんは、配信は「劇場とは別のラインナップでやっていく」と言われましたが、ここをもう少し詳しくお話しいただけますか。

浅倉　「APARTMENT」のコンセプトの話になりますが、私は、学生時代に映画館でアルバイトを始めて、そのまま映画館に就職したので「映画は映画館で見るもの」という考え方が強いです。その一方で、中高生の頃にDVDで見てすごく「刺さった」映画もいっぱいあります。パンデミックになって、外に出られず、家で窓の外を眺めていると、中高生のときに夜中にDVDで見た映画が教えてくれた包まれる孤独と優しさみたいなものが思い出されて「部屋で見るからこそ、ひとりで見るからこそいい映画」も結構あるんじゃないか、それをなんとか言語化しようと思って、最終的に「ひとりひとりに寄り添う映画を、よりパーソナルな空間で楽しむ。」というコピーになりました。

映画館で『偶然と想像』を上映していると、笑い声が起きたり、泣いている人もいたりする。それを共有できるのは、一番素晴らしい映画の魅力ですが、同時に、家でひとりさめざめと泣くみたいな経験も大事で、すごく曖昧なニュアンスなんですが、この映画は家で見てもすごく刺さるものがあるだろうという作品を「APARTMENT」で公開したいという感じですね。

コロナ禍の国際映画祭
「山形国際ドキュメンタリー映画祭」オンライン開催

志尾　ここからはちょっと映画館から離れて、映画祭のお話を聞きます。山形国際ドキュメンタリー映画祭は日本屈指の国際映画祭で、私も2年に一度、山形に行くのを楽しみにしています。それが、去年はコロナで完全にオンライン開催になりました。隔年開催の国際映画祭をオンライン開催にするというのは大きな決断だったと思います。

畑あゆみ　山形国際ドキュメンタリー映画祭は、2006年にNPO法人を設立して山形市から独立しました。その前は市役所の中に実行委員会として事務局がありましたが、独立して以降は、映画祭をやるだけではなく地元に根付いた上映団体として日常的にも活動を続けています。映画祭は隔年で10月に開催していて、1年前から準備を始めます。山形事務局は、映画祭全体のマネジメントをしていて、主に会場の場づくりや資金調達等を担っています。

オンライン開催決定までの経緯

2020	
6月	作品募集開始を2020.9.1→11.1に決定（延期）
8月	「例年通りの日程で、実会場開催」を仮決定　**※規模はコンパクトに**
11月	作品募集スタート
12月	**会場上映＋会期前後に特別配信プログラム設置案**を検討
2021	
2月	プログラム、会場使用案決定　電子チケットシステム導入他感染対策を検討
4月	開催最終判断時期を決定 →「**会場開催＋一部配信のハイブリッド**」**または**「**完全オンライン**」**で調整** 配信プラットフォームの本格検討開始
7月中旬	「**完全オンライン開催**」**決定**→会場キャンセル
10月	開催

決定要因（会場上映を断念した理由）
① 地域医療規模の限界 / 映画祭から地域にクラスターを出すリスクは避けたい
② 観客、ゲストに対し居住地（県内/県外、国内/国外）による「線引き」をすべきでない
③「延期」は困難
④ オンラインのよさを生かす（観客層の拡大）

オンライン開催決定まで

畑　2020年から準備を始めていて春頃にはコロナが大変な状況になっていましたが、2021年には何とか終息するんじゃないかと、会場開催を目指して準備を続けました。

作品募集は例年、開催前年の9月に開始するのですが、2020年は延期して2ヶ月後の11月にスタートしました。作品の集まり具合は例年と同じぐらいで、コロナの影響は感じませんでした。2020年の年末までは「会場開催」と考えて動いていましたが、2021年になってもコロナが終息する気配がなく、むしろ緊急事態が発出される状況で、会議を重ねて、現実問題として、国内外問わず、山形に来られない人が多いだろうということで、会場開催の前か後に特別配信プログラムをやることも考え始めました。

5月にNPO法人の総会があり、例年はそこで記者発表をしています。2021年5月の記者発表では、7月末ぐらいに最終決断をすることを発表しました。それまでに「会場開催＋一部配信」のハイブリッドにするか、「完全オンライン」にするかを検討することとなり、7月中旬に完全オンラインでの開催を発表しました。

オンラインを選択した主な理由は、第一に、映画祭から地域にクラスターを出すリスクは避けたいということ。山形市の人口は25万人を切るぐらいで、コロナの重症者用の病床数も少ないので、そこで海外ゲストを迎え、全国の皆さんに開いた国際映画祭をやるのは無茶だという懸念がありました。地元の法人の理事の反対も非常に強かった。映画祭からクラスターを出してしまうと、それがあとに響いてくるんじゃないかと。県内からの観客だけにしぼって会場開催にしてはどうかという案も出ましたが、それは公平性に欠ける。国際映画祭として、観客・ゲストに対し、居住（県内/県外、国内/国外）による「線引き」をすべきではないと考えました。延期という可能性も考えましたが、我々は年度で補助金をいただいているので年度を越えることはできない。年度内で時期をずらすとなると真冬の雪の多い時期の開催になりますが、それは運営側が慣れていないので無理だろうということになりました。最終的に、オンラインのよさを生かして、観客層を拡大することができるかもしれない、いい点もあるかもしれない、ということで完全オンライン開催を決めました。

オンライン映画祭の概要

畑　配信はVODではなく、日時指定にしました。上映（配信）する時間を決めて、皆さんに一緒に見ていただく。上映時間＋1時間の余裕をもってその時間だけ配信を行うという形です。5日間で54本の作品の配信を行いました。コンペティション2部門の作品はそれぞれ2回（権利の関係で1回だけになったものもありますが）上映で、いつもの映画祭に近い形で提供しました。Q&Aは作品の配信の直後に30~40分ぐらい、Zoomのウェビナー機能を使って同時通訳を入れて、ライブ配信を行いました。山形市内に貸スタジオが入っているビルがあって、そのスタジオと下の喫茶店を借りて、そこを配信基地にしてQ&Aをやりました。

審査上映だけは会場で行うことにして、コンペティション2部門の全作品を「フォーラム山形」の一番小さいシアター 2つを借りて5日間で審査をしていただきました。DCP上映で、上映用に日本語と英語の字幕も作ったので、この点では通常の映画祭開催と同じぐらいの金額がかかっています。

山形国際ドキュメンタリー映画祭の“夜の交流の場”としておなじみの香味庵クラブもオンラインで実施しました。実は、香味庵クラブの会場と料理を提供してくださっていた「丸八やたら漬け」が2020年5月に廃業されて、場所自体がなくなってしまったのですが、「スペシャル・チャット」というアプリケーションを使い、オンライン上に交流空間を設けて、夜な夜な皆さんに集っていただきました。

開会式や授賞式、閉会式といった式典だけは、関係者だけでメイン会場である中央公民館で行いました。

映画祭の公式ウェブサイトとは別に、配信チケットの購入サイト、視聴サイトを連動する形で作り、運営はまずまずうまくいきました。事前に国内映画祭や海外の国際映画祭がどんな形でやっているかを詳細にリサーチしましたが、オンライン開催を決めて特設サイトの立ち上げに至るまでの間に、東京フィルメックスや大阪アジアン映画祭の皆さん、神戸映画資料館の田中さんをはじめ、大変多くの方々から情報提供をいただいて、ようやく形を整えることができました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

オンライン映画祭と普通の会場でやる映画祭とは全く違うということが、今回やってみてよくわかりました。簡単に比較はできませんが、2019年の実会場でやった映画祭と比べると上映本数は3分の1に減りました。

配信基地の様子（Q&A）

オンライン「香味庵クラブ」（山形市の温泉を背景に）

今回の視聴者数と前回の入場者数を比較するのは難しいのですが、延べ視聴者数と延べ入場者数は大体同じぐらいです。とはいえ、上映作品数は大幅に減らしていますので、参加人数の実数としては少なくなっていると思います。

比較データ表

YIDFF 2021 data

2021.10.7~14（本祭）+ 2021.11.7、11.14（文化庁映画賞受賞作品オンライン上映）
配信作品本数（shift72）：**54本**（前回2019：176本上映）

（1）作品視聴者

一般視聴者……**5,925人**（延べ）
プレス視聴者……**3,120人**（延べ）

（2）Q&A、シンポジウム等イベント視聴者

ライブ配信視聴者（zoom）……**3,021人**（延べ）
アーカイブ配信視聴者（youtube）……**9,724人**（延べ）
内　開・閉会式配信視聴者（youtube）……**2,671人**（延べ）
オンライン香味庵参加者（spatial chat）……**584人**（延べ）
（前回2019 入場者総数：22,858人（延べ））

特設サイト YIDFF ONLINE！トップページ
総アクセス数（2021.9/24オープン~11/21まで）……**34,821回**

海外の国際映画祭

濱治佳　ここからは、海外の映画祭がどのようにオンラインを活用していたかをお話させていただきます。ご存知のように世界中でたくさんの映画祭が開催されていますが、私たちは、その中でも特にドキュメンタリー映画祭がどのような方法で行われているかを調べました。山形国際ドキュメンタリー映画祭の形を模索していた2020年3月~2021年5月に開催された映画祭からいくつかのケースをご紹介します。

まずは、比較的規模の大きな映画祭、一般向けの上映だけではなく、映画業界の人が集まるマーケットの場でもあるような国際映画祭です。フランスの「シネマ・デュ・レエル」とオランダの「アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭」は非常に参考になりました。

シネマ・デュ・レエルは3月に開催されていて、2020年は直前まで会場で開催する予定だったのですが、フランスがロックダウンして急遽オンラインになりました。審査もオンラインで行われました。翌年、2021年3月は、上映はオンライン・日時指定配信・有料・国内限定となっていて、上映の後の質疑応答はライブ配信で、2回目の上映のときには、1回目のライブ配信の映像をアーカイブ配信する形をとっていました。マーケットの上映は、有料・登録制ですが、全世界から参加できる形で行っていました。

アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭は、世界で最も大きいドキュメンタリー映画祭で、2020年（11月18日~12月6日）は会場とオンラインのハイブリッドで開催していました。映画館での上映も行われましたが、客席を極端に制限していて、通常だったら100~200人入るところに20~30人しか入れず、現地の人たちも希望者全員が入れる状況ではなかったようです。こちらも業界向けの上映はオンライン・有料で世界対応していて、質疑応答は録画したものを上映したようです。

当時（2020年秋）、日本の映画祭では日時指定配信はまだ行われていませんでしたが、どちらの映画祭も、一般上映の配信は日時指定配信で「オンデマンドではない」ということにこだわっていました。コピー防止策が十分に施されているプラットフォームを使って配信を行い、視聴者も国内限定としています。また、両映画祭とも、審査は大スクリーンの会場で行っていました。

次に、私を含め、スタッフがオンライン審査という形で招待を受けた映画祭を二つ紹介します。ひとつは「クリチバ国際映画祭」というブラジルの映画祭、もうひとつはインドネシアの「ジョグジャカルタドキュメンタリー映画祭」です。

どちらも地域に根ざした地元の住民向けの上映が非常に盛んな映画祭です。両方とも基本的にオンライン開催でしたが、2020年11月25日~12月14日に開催されたジョグジャカルタドキュメンタリー映画祭は、一般向けには24時間視聴可能の無料上映、審査もオンラインで行われました。クリチバ映画祭は日時指定の有料配信ですが、非常に安価な設定で日本円にして100円くらいだったと聞いています。こちらの配信はブラジル国内限定でした。どちらの映画祭もトークイベントやQ&A、ワークショップなどはオンラインでも行っていて、非常に盛り上がった様子でした。

映画祭開催の工夫として特徴があるなと思ったのが、会期を分けてオンラインと会場開催とした映画祭で、「ロッテルダム国際映画祭」は2021年の1月と6月に開催、「ベルリン国際映画祭」は2021年3月と6月に開催されています。「ヴィジョン・デュ・レエル」というスイスのドキュメンタリー映画祭は、オンラインで開催準備を進めていましたが、2021年4月にスイスの映画館が開くことになり、急遽ハイブリットで行うことになり、それが非常に成功したと聞いています。

これらの国際映画祭から私たちが参考にした点を6点ほど挙げてみます。まず、国内限定の日時指定有料配信。映画祭本来の形を模索して日時指定としています。実際、私もオンラインで映画を見ようとするとその時間を作るのが難しいのですが、日常の中に映画を見るという体験を持ち込み、時間を作り出すには、日時指定とするのがいいと思いました。

次に、質疑応答はライブ配信で行いたいということ。映画を製作した監督たちに、どんな人が見ていて、どのような感想を持っているか、生の

反応をフィードバックしたいと思いました。録画の質疑応答は、大体プログラマーが行うので割と無難な内容になりがちで、見ていた人は聞きたいことが聞けなかったんじゃないかなと感じることもありました。
それから、審査上映はスクリーン上で行いたいということ。これは早い段階から私たちは切望していました。審査員が同じ環境で見ないと、その作品に対する緊張感みたいなものが違ってくる。私自身が審査をして感じたことでもあり、そこは守りたいと思いました。
山形国際ドキュメンタリー映画祭には業界向けの上映はありませんが、コミュニティシネマの関係者とか、多くの映画業界の方たちが来られて、映画を見て、配給につながる活動が行われる場でもあるので、プレス用のビデオライブラリーは設営しようと考えました。また、オンラインでできることは可能な限りやろうということで、ワークショップは積極的に開催しました。
私が審査をしたクリチバ映画祭からゲストバッグが送られてきて、カタログやプログラムなどいろいろなものが入っていて、現地に行くことはかないませんでしたが「参加している」という実感を持てたので、私たちも山形国際ドキュメンタリー映画祭で作品を上映する監督たちにはカタログに合わせて山形の美味しいものなどを詰めたケアパッケージを映画祭の前に発送しました。

畑　オンライン開催にはメリットもあります。コロナに関わらず、山形まで来られないという方はたくさんいらっしゃいますので、オンラインで今回初めて参加することができたという声も聞きました。学生にとっても敷居が低くなったのかもしれないなと感じています。ただ、やはりオンラインと実会場での開催は全く違うもので、予算の使い方も全く違うし、作り方も全然違うということは改めて認識しました。
私たちは、オンラインになったことで、会場を走り回らなくてすみました。事務局はスタッフの数が少なく、期間中はいつも6会場、9スクリーンぐらいの間を走り回っていますが、今回はそうした物理的な負担は減りました。一方で入場料収入や協賛が減ったので、そこはデメリットでした。
私たち映画祭も、映画館と同じような課題、“やりがい搾取”と言われるような労働問題を抱えています。山形国際ドキュメンタリー映画祭は市から補助金が出ているから大丈夫だろうとよく言われますが、人件費に割くことができる予算はそれほど多くはなく、事務局では2年に1度の映画祭開催時だけ招集されるスタッフもいて、不安定な雇用状態を強いています。今後も若い世代に映画祭に来てもらいたいし、運営スタッフとして経験を積んでほしいと思いますので、映画祭も持続可能な環境を整えなければならないと考えています。

志尾　山形国際ドキュメンタリー映画祭は山形市との共催で行われている映画祭ですから、事務局の労働環境を整えることは、よい映画祭としてレベルを保つためにも必要であるということを強く言っていいと思っていますが。

畑　国内で開催される国際映画祭が減っている中で、決して大きな自治体ではない山形市が映画祭に対してこの規模の支援を継続して行っているという現状については、よく頑張っているなと思います。国レベルでも文化庁などを中心に、積極的に支援をお願いしたいと思います。

映画館の「持続可能性」について

志尾　きょうは時間が限られていてディスカッションの時間が取れず、残念なのですが、最後に、皆さんから「持続可能な」映画館・上映活動について一言ずついただきたいと思います。

浅倉　私は映画館がすごく好きなので、映画館には持続してほしいと思います。一方で、先ほどからお話に出ているように労働環境に問題があることも見えてきました。何が何でも持続すればいいんだというのではなく、何らかの「ロールモデル」が必要だと思います。すべてがそれに従う必要はないにせよ、モデルとなるようなミニシアター、コミュニティシネマのあり方、社会に対していいものであることを提示することができれば、こんな存在なのだから持続する必要があるよねと認識されるようになる。そういう流れになるのが大事かなと思います。偉そうなことを言うわけではありませんが、少なくとも「人の命を大事にしよう」ということは持続可能性の基本にあるべきだと思います。

大高　確かに持続することだけが目的になっちゃいけないなと思います。「K2」では、月額型のオンライン・コミュニティとかクラウドファンディングとかを実施予定で、リアルな映画館のエコシステムをオンラインでも保つという試みを始めています。持続可能性を高めるためには、エコシステム全体を循環させることを俯瞰して考えていかなければならない。いろんな層のプレーヤーが、ある種同じ目標に目線を合わせてやっていかなければならないんじゃないかという話をしようと思っていましたが、確かに持続可能性が目的になるとそこでひずみが生まれる。そこはもう少し肩の力を抜いて考える必要もあるのかなと思ってしまい、言うことがなくなってしまいました(笑)。ロールモデルを考えるといっても、あまり肩肘張らずに、こうあらねばならないという教条主義に陥ることなく、しなやかに、柔軟にやることが重要なのかなと思います。

小坂　持続可能性で言うと、運営の形を考える必要があるのかなと思います。現在は、ミニシアターはスタッフも少ないのに、ほぼ休みなく1年間360日ぐらい朝から晩まで営業しているところがほとんどだと思いますが、定休日を設けるところがあってもいいし、営業時間も思い切って短くするとか、企画レベルで映画館それぞれにオリジナリティがあるように、営業の形もそれぞれの映画館が自分たちの地域の環境に合わせて、オリジナリティを出してもいいのかなと思います。

林　私たちが健やかに働ける、たくさん人を雇うことができる、十分なお

給料を支払えるようになるためには、絶対条件として、観客が増えることが最も重要だと思います。単純にいうと映画を見る人口を増やさなきゃいけない。でもこれは難題なので、小坂さんが言われたように、毎日朝から晩まで映画をかけなければならないとか、休むことなく毎日映画を上映しなければならないとか、いろいろ私たちが縛られている映画業界の常識みたいなものを手放す勇気が求められているのかなと思います。そして、また、それぞれの地域で必要とされる存在であるということが、持続可能性を高めることにつながると思うので、そのためには、映画の上映を大切にするとともに、地域に対して映画館を開いていくことが重要かと思います。具体的にはどんなことができるのかを考えて行きたいです。

山崎　皆さんがおっしゃったことに付け加えると、若い世代の観客の開拓ということをずっと考え続けています。先ほどお話させていただいたように、映画チア部大阪支部の企画は必ず満席になる、しかも若い人が来てくれる。そういう企画は若い人じゃないとできないのかなと感じています。若い人たちが何を求めていて、何を見たいのかをもう少し考えたい。それと、深刻な問題として、若いスタッフの中には、映画館で正社員になりたくないという人もいて、こちらとしては正社員になって映画館で仕事を続けてほしい、続けたいと思われる場所でありたいのに。次の世代のことも考えていかないといけないなと思います。

志尾　短い時間の中で十分にディスカッションの時間が取れなかったのですが、私たちが、いまこそ新しい意識を持って、そして胸を張って映画上映を続けていけばいいんだということがわかった時間だったと思います。そして、きょうはあまりお話することができませんでしたが、公共的な存在である映画館、ミニシアターやコミュニティシネマが安定的に持続して行くためには公的な支援も重要です。このことも継続的に皆さんと考えていきたいと思います。
今日は皆さんご参加いただきましてありがとうございました。

2022年2月3日｜全国コミュニティシネマ会議2021

全国コミュニティシネマ会議　チラシ